

北海道ヒグマ保護管理検討会での検討概要

1 開催日時

令和5年8月28日（第1回検討会）

令和5年10月16日（第2回検討会）

2 開催趣旨（主に第2回検討会）

- ・今年2月に開催した令和4年度第2回検討会で、あつれき抑制のための捕獲のあり方を中心に、次期計画改定に向けた検討事項を整理したところ。
- ・さらに、市街地出没等のあつれきが各地で高まっていることを受け、道議会において活発な議論がなされたところ。
- ・こうしたことを踏まえ、現行計画見直しの検討を加速させて、計画期間終了を待たずに、計画の充実のための見直しを進めることとした。

3 主な意見（第2回検討会）

(1)ヒグマ管理計画について

検討する8項目を提示し、意見を聴取

① 個体数のあり方など（現行計画では捕獲目標の設定が無いことについて）

- ・ 個体数水準をどこまで抑えるべきか十分な議論が必要
- ・ 個体数の水準が決まると捕獲目標が決まってくる
- ・ 試行的な目標を設定しながら管理方法を見いだすことも一つの方法
- ・ 絶滅予防水準に近づけていくことも考えられる
- ・ 捕獲目標を立てる場合は、地域個体群毎に設定すべき など

② ゾーニング管理の導入

- ・ 広域レベルは地域版実施計画で位置づけて、集落レベルは市町村行うべき
- ・ 道がGISなどで一律にエリアを示して、その後市町村の意見を踏まえて変えていく方法もある
- ・ 地域によって事情は異なり、地域ごとに提案していくべき

③ 生息実態の把握

- ・ 狭い地域でも精度の高いヘアトラップ調査と、精度は低いが広範に行っている広域痕跡調査の組み合わせが必要。
- ・ 専門的人材が配置され、こうした調査を担っていくのがよい

④ 軋轢の指標

- ・ 今のシステム（3号様式）では問題個体の推定に繋がっておらず方法を検討する必要
- ・ 人が感じる軋轢と問題個体の把握は必ずしも一致しない
- ・ 人の恐怖心は重要な被害であり、把握しておくことは重要
- ・ 調査対象の選定含め、どういう形で把握するのか手法の開発が必要

⑤ 普及啓発

- ・ 教育庁と連携して子どもの学習で取り組むべき。軋轢(人の感じ方)とも関連している、人側に正しい知識が必要
- ・ 農業や観光など関係する複数の部署の連携が重要
- ・ 住民の生の声を伝えることで、担い手づくりの後押しにもなる

⑥ 狩猟期間の延長

- ・ 個体数目標達成のために必要になるのかどうか検討が必要
- ・ 本州からハンターが入ることにより捕獲頭数を上げることに繋がる可能性

⑦ 捕獲従事者の確保

- ・ クマ猟を担う人材育成と、狩猟者の裾野を広げるのとは異なる
- ・ 地域で活躍できる受け皿が必要になる。
- ・ 有害捕獲に関わる従事者は、地域とのつながりが必要

⑧ 計画の目的

計画の目的にある、「人とヒグマとのあつれきを低減するため、ヒグマとの緊張感のある共存関係の構築を目指し」という表現について、ヒグマとの軋轢が高まり、緊張感がある現在においては、誤解を与えるのでは、との懸念について。

- ・ むしろ「緊張感のある」にこだわって、アピールしていくべき
- ・ 野生動物との関係において常に緊張感が必要であり、このままでもよい

(2) 春期管理捕獲について

- 制度の目的に、人里出没抑制と人材育成に加え、「低密度化」を追記する(了承)
- 人里に隣接した区域の考え方について
 - ・ 雪解けが早く、4月になると裾野から3kmほどは足跡を追える状況ではないということもあり、効果を期待するためには、現行の冬眠中のクマや親子グマの捕獲を認める「人里から3～5km」の範囲を広げることも必要(了承)

3 その他

- ・ 計画見直し時期は明示していない。
- ・ 次回開催は来年2月予定(改正概要(事務局案)を示す)。